



第2章 地域づくり支援と自治体史編纂

木村, 修二 ; 三村, 昌司 ; 石川, 道子 ; 坂江, 渉 ; 村井, 良介 ; 添田, 仁 ; 前田, 結城 ; 佐々木, 和子 ; 河野, 未央 ; 奥村, 弘 ; 河島, 真 ; 深見, …

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 8(平成21年度事業報告書):29-39

(Issue Date)

2010-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002059>



第2章 地域づくり支援と自治体史の編纂

包括協定にもとづく灘区との連携事業

平成 17 年度に制作した『篠原の昔と今』、および 18 年度制作の『水道筋周辺地域のむかし』の両冊子は、本年度も断続的に配布依頼が続き、昨年度以来初版の在庫が切れていた前者を当年度中に 500 部重版し、配布を再開した。後者は平成 22 年 2 月 28 日現在で残りおよそ 150 部となっている。

昨年度より、当センターが発行した『水道筋周辺地域のむかし』の内容をベースとして脚本が組み立てられつつあった神戸大学児童文化研究会による人形劇が、「第 7 回灘文化軸・秋の大芸術祭」（灘文化軸秋の大芸術祭実行委員会主催、11 月 1 日より 1 ヶ月にわたって開催）におけるイベントとして、11 月 14 日に原田の森ギャラリーにおいて上演された。タイトルは「本当に大切なもの」と題し、江戸時代における村同士の水争いという難しいテーマを子供たちにもわかりやすい内容に仕立てられた力作だった。この人形劇上演のあと、木村による小講演「江戸時代の水物語—水道筋周辺地域のむかし—」も行われた。この小講演は、人形劇で扱われたテーマを補足説明する目的で、主に保護者向けに行ったものだった。

（文責・木村修二）

神戸市文書館との連携事業

(1) 地域史料の収集整理・公開・活用に関する共同研究事業

2006 年度より始まった、神戸市文書館との地域史料の収集整理・公開・活用に関する共同研究事業を今年度も継続して行った。文書館の開館日である月曜から金曜日の午後 1 時から 5 時まで、学術推進研究員の森田竜雄、樋口健太郎、三村昌司（2009 年 4 月～11 月）、人文学研究科博士課程の浅利文子（2009 年 12 月～2010 年 3 月）が事業を担当した。

事業内容として、①館蔵史資料の整理および史資料の管理方法・利用環境の改善、②来館者および電話による問い合わせに対するリファレンス対

応、③史資料の出納などのカウンター業務への協力、④企画展「鹿島秀麿と明治の神戸」開催、などを行った。

特筆すべき点としては、①について、「王蔵院文書」「八尾家文書」「山脇延吉文書」の本整理を進め、「八尾家文書」については整理を完了し解題を作成した。「王蔵院文書」「山脇延吉文書」については来年度も継続して整理を進め、公開をめざす予定である。また、館蔵史資料の利用状況改善をめざして、館蔵史資料のデータベース化を進めている。

④について、昨年度に続き今年度も企画展を開催した。この企画展「鹿島秀麿と明治の神戸」（2009 年 9 月 7 日～25 日）は、文書館に寄託されている「鹿島秀麿文書」を中心に構成されたものである。金曜日の開館時間を午後 7 時まで延長したこともあり、昨年度の企画展を上回る 134 名の来館者があった。

ただし開館日が主に平日の午後であることから、館の利便性については依然課題を残している。文書館の持つ史資料や企画展の情報発信を HP 等で今後一層進めるとともに、館の利便性についての改善も今後必要になってくるだろう。

(2) 阪神・淡路大震災関連公文書等の調査・整理・公開に関する共同研究事業

今年度より新たに、神戸市役所に保存されている阪神・淡路大震災関連公文書の調査・整理・公開に関する共同研究がはじめられた。整理については、おおよそ週 1 回のペースで、学術推進研究員の三村昌司（2009 年 11 月）、水本有香（2009 年 12 月～2010 年 3 月）が作業の統括を行った。

今年度における試験的な整理作業と調査の対象となったのは、企画調整局企画課と中央区役所の関連公文書である。これらの場所で蓄積された作業のノウハウは、今後の市全体の整理作業の指標とする予定である。

なお、震災関連公文書の整理については、矢田立郎神戸市長が「復興に向けて市が取り組んできた記録を後世に伝えていく必要がある。何年かかってもやり遂げることが、被災地としての使命」と意欲を示しており（2010 年 1 月 9 日『読売新聞』）、来年度から市全体の震災関連公文書整理が本格的に行われる予定である。

（文責・三村昌司）

財団法人住吉学園との連携事業

財団法人住吉学園との連携事業は、学園が管理している住吉歴史資料館（本住吉神社境内に所在）の運営を中心として進められている。その運営は、学園より要請された地元有志が中心となっており、後述のように当センターはそのサポートを専門的な立場から行っている。以下、当年度の活動の概要を記す。

(1)『住吉歴史資料館だより』の発行



本事業は、将来の大目標として『新・住吉村誌』発行を置いているが、当面はその準備を行うべく、住吉地区在住の有志の方々とともに少しずつ調査を進めてゆくことになっている。その調査の成果を周知すべく、『住吉歴史資料館だより』という小冊子を、年間2回程度で定期的に発行することとなった。その創刊号は9月に発行されている。創刊号では、住吉学園理事長本田隆志の「創刊にあたって」および当センターを代表して奥村より「ごあいさつ」が掲載されている。また「江戸時代の住吉村の地図」と題する小文を木村が執筆し掲載されている。また「小学校・中学校のみなさんへー私たちのふるさと住吉ー」と題おする一文を編集部で用意するなど、本誌が地区内

の小中学生への情報発信も目的としていることを示している。第2号は3月末日発行予定である。

(2)古写真調査・聞き取り調査

資料館運営チームは、当センターメンバーが専門委員として加わっているが、基本的には地元の有志の主導で事務・資料館だより編集、調査方針などが組み立てられている。あとで述べる古文書調査は、当センターから出向している木村が主に担当しているが、地域の記録として重要な位置をしめる古写真の調査は、内田雅夫氏をはじめとする地元有志によって企画・遂行されている。この古写真調査には、東灘区役所の協力もえており、さらに近隣の灘中学校の教員も積極的に関わるなどして進められているが、すでに相当数の写真が収集されつつあり、住吉のものを中心とする古写真集の発行がいま目指されている。

また聞き取り調査は、できるだけ早く古老からの聞き取りを行っておく必要があるとの認識から今年度後半より企画された。まだ1名の方からの調査しか実現していないが、次年度以降もピッチをあげて聞き取り調査も進めていく方針である。

(3)文献資料調査

古文書を中心とする調査は、資料館の運営上でも極めて重要な事業だが、住吉地区は昭和20年の大空襲で当時の住吉村役場が焼けるなど、地区内の被害に遭った家も数多く、長い歴史をもちながらも古文書の残存が極めて少ない地区となってしまう。それでもわずかに遺された古文書を求めて少しずつ調査が現在進められている。代表的なものは本住吉神社宮司の横田家に伝わったもので、横田家の分家筋が庄屋となっていた時代の村政文書を含むまことに貴重なものである。これら古文書調査の成果も、資料館だよりなどでまとめてゆく予定である。（文責・木村修二）

神戸市東灘区御影石町の木村酒造との連携事業

二〇〇六年一〇月に木村酒造から預かった古文書の整理が一応終わったが（二〇〇八年度）、最近、まだ史料が残っていたとのことで見せていただいたところ、明治から昭和期の帳簿類を中心にダンボール十数箱分の残存状態のよいものでした。朽損史料は「片付けた」とのことでした。住宅事情等もあり、このようなことが往々にして起

こることはこれまでも経験してきましたが、残念なことです。

前回の史料（文書箱一二箱分）はご好意によって伊丹酒造組合事務所（小西酒造株式会社本社内）に仮置していますが、今回は分量的にここに置くことができませんので、神戸市文書館に依頼したところ、とりあえず預かりますが整理などについては今はできないという条件で、置くことは引き受けていただきました。

もう一件、古書目録にでていた木村家文書があります。今回の件で文書館と話をすすめていたとき、古書店で競売される中に当家の文書がありました。木村家に問い合わせたところ、震災後古い道具類を売ったとき、そこに紛れ込んだ文書類だとのことでした（酒のラベルその他）。これは大学で買い取り、古文書室に保存しました。

この後さらにまた、近世文書が一箱分残っていたとの連絡があり、一部のみ家に残して、あとは捨てたいとのご意向が堅かったため、緊急避難的に伊丹酒造組合に置かせていただくことになりました。

結局、現在木村家文書は、一部（木箱入り一式と一紙文書数点）を木村家に残し、あとは伊丹酒造組合（仮置・寄託）・神戸市文書館（寄託）・文学部古文書室（買取）に分割して置かれている状態です。置き所について早い処置が必要です。（文責・石川道子）

神戸市水産会との連携事業

神戸市水産会〔神戸市漁業協同組合、兵庫漁業協同組合、財団法人神戸みのりの公社、および神戸市〕では、神戸市の名産品であるイカナゴの釘煮をアピールするために、昨年度 3 月 15 日に「いかなごぎ煮学認定試験」を実施した。試験は、神戸市立水産会館および神戸市立水産体験学習館で行われた。この試験には、当センターをはじめ神戸商工会議所垂水支部など 12 団体が協力している。出願者は 132 名だったが、受験者は 105 名にとどまった。このうち合格者は 92 名で、合格者には合格認定証を送付している。

試験問題は、四択問題が 75 問、記述が 1 問だったが、アンケートでは 105 名のうち 29 名が難しいと答えるなど問題作成に課題が残った。

今年度は第 2 回目の「いかなごぎ煮学認定試

験」へ向けて企画が進められ、昨年同様当センターも神戸市水産会からの要請に基づき、テキスト作成などで協力をした。「第 2 回いかなごぎ煮学認定試験」は、本報告脱稿後の 2 月 28 日（日）、神戸市立水産会館集会ホールを会場として開催される予定である。（文責・木村修二）

神戸元町商店街連合会との連携事業



2009 年 10 月、本学 2 人の教員を通して、神戸元町商店街連合会（みなと元町タウン協議会、奈良山喬一会長）から本センターに対し、西国街道と元町商店街に関わる歴史モニュメント設立への協力要請があった。センターではこれを受け、たいへん短い期間だったが、関係する研究スタッフや教員がモニュメントの文案作りに協力した。同年の末には、「西国街道モニュメント」が完成し、12 月 21 日、神戸市中央区元町通 4 丁目の「こうべまちづくり会館」前に設置され、その除幕式がおこなわれた。同モニュメントには、元町商店街のいわれや西国街道との関わりについて記した文章や、江戸時代と明治時代の周辺地図が付けられており、誰でも見学することができる。

完成後の懇談会では、今後とも両者間の連携・協力関係を深めていくことが話し合われた。

（文責・坂江渉）

神戸市淡河における連携事業

地域連携センターがおこなった『新修神戸市史』編纂事業の受託研究の中で、石峯寺の史料調査を進めてきたが、新修神戸市史の調査期間が 2007 年度までで終了したため、石峯寺子院の竹林寺・十輪院の史料調査の未了部分については、引き続き地域連携センターが史料を借用し、調査

・撮影等をおこなった。すでに撮影は終了し、次年度以降目録を作成する。(文責・村井良介)

包括協定にもとづく小野市との連携事業

神戸大学と小野市の間では、2005年1月26日に社会文化にかかわる連携協定が結ばれ、それ以来さまざまな共同事業がすすんでいる。今年度の事業内容は以下の通りである。

1. 小野市立好古館 一平成21年度秋季特別展 (地域展)「大地に刻まれた歴史 一 来住地区の古代・中世」の開催協力と博物館実習の実施

昨年度に引き続き、今年度も小野市来住地区での「調べ学習」を基軸にして、2009年10月31日～12月13日の会期で、上記のテーマの展示会を開くことが決定した。昨年度は事前説明会の実施がかなり遅れたが、今年は例年通り、5月頃から開始。子供たちを中心とする「調べ学習」も7月26日から始まり、合わせて11地区15回ほどおこなれた(8月27日まで)。

これに対してセンターでは、教員4名、研究員2名が「調べ学習」の援助をおこない、学生1名が博物館実習として、この活動に取り組んだ。またこのほか神戸大学ボランティア学生が1名、さらに立命館大学非常勤講師の1名もこれに自主参加した。「自主参加」というのは、大学の講義等を通じて好古館の取組を知って興味をもって参加した人たちのことで、この事業が少なくない学生や社会人の関心を惹きつけていることが分かる。

今年度も「地域調べ学習」に参加する場合、なるべく同一地区を2回セットで参加するよう呼びかけたので、昨年度と同様、スムーズな動きをとることができた。もちろん各地区の地元の方々との熱心な取り組み、あるいは来住小学校の地区担当の先生方の積極的なご指導・援助があったことにより、全体として今年度の「調べ学習」は上手く運んだことはいままでのない。なお今年度の調査期間中は、台風による水害が県内各地で起こるなど、天候が不順により、「調べ学習」を短縮したり、屋内で実施する地区が少なくなかった。

今年度の神戸大学の取組や調査体制の詳細については、小野市立好古館・本センター編『小野市立好古館特別展図録 大地に刻まれた歴史～来住地区の古代・中世～』(2009年10月刊)に載せられている。また同書には、博物館実習に参加し

た学生の「実習レポート」も収められている。

2. 「青野原俘虜収容所展 in Tokyo 2009」

2005年度に好古館で開いた地域特別展「青野原俘虜収容所の世界」展、俘虜たちの演奏会の再現コンサートについては、昨年度の2008年9～10月に、オーストリアのウィーンで「里帰り展示会」等として開くことができた。今年度はこうした国際的な事業成果を踏まえつつ、さらにそれ以降の本学と小野市との共同研究の成果を公開するため、「青野原俘虜収容所展 in Tokyo 2009」の講演会・再現演奏会、資料展示会の開会式が、2009年11月7日から東京にて開催された。

講演会・再現演奏会は11月7日午後5時から、東京都のドイツ文化会館・OAGホールで開始され、まず大津留厚・人文学研究科教授、岸本肇・名誉教授(現・東京未来大学教授)、ヘルムート・ヘーデル氏の3人が、俘虜収容所をめぐる講演。続いて、収容所で俘虜たちが開いていた音楽会の再現に移り、小野市と同様に俘虜収容所があった千葉県習志野市の「町の音楽好きネットワーク」による演奏・歌唱と、神戸大学交響楽団有志による演奏(写真上)があった。ほぼ満席の200名近い入場者が、俘虜たちが異国の地で奏でた音楽に耳を傾けた。

また資料展示会の開会式は、主催者である神戸大学、小野市及びオーストリア大使館の関係者が集まり、11月11日午後6時半から、オーストリア大使館内オーストリア文化フォーラムで開かれた。オーストリア大使館文化担当参事官のミヒャエル・ハイダー氏、小野市教育長の蔭山茂氏、本学地域連携担当の中村千春理事による挨拶の後、大津留教授による展示品説明がおこなれた。資料展示会は、同じオーストリア文化フォーラムで、11月21日まで開催された。

今年度の事業としては、これと並行して、新発見された「俘虜収容所」関連の写真資料の分析調査活動が、市内の歴史研究団体と共同してすすめられた。それにもとづき来年度には、もう一度、「俘虜収容所」関連の展示会企画を小野市内で開催する企画が準備されている。(文責・坂江渉)

連携協力協定にもとづく朝来市との連携事業

朝来市生野町と神戸大学の「連携協力に関する協定」は、昨年度に発見した石川家文書の整理を行い、

新たな活用の方向性を見出すことを意識しながら事業を展開した。

1、石川家文書の整理

昨年度に引き続いて、生野銀山南の旧森垣村に位置した石川家が所蔵する古文書の整理を開始した。整理には、添田仁があたった。内容は、主に近隣の掛屋や山師との書翰、冠婚葬祭にかかわる帳簿群である。来年度は、全体像の把握、各文書のカード作成・内容把握を進める。

また、石川家が輩出した歴史家・石川準吉関係の資料群の調査を開始した。これは、生野銀山研究者でもあった同氏が東京で収集していた関係文書、ならびに官僚時代に立案・策定に携わった法律にかかわる書類、名著『国家総動員史』の草稿などを、長男の通敬氏が整理・保管してきたものである。同資料群について 2 月 22 日に神戸大学で協議をしたのち、3 月 17 日～18 日に現地調査を行った。

今後、石川家と生野銀山をめぐる総合的な研究を進めていくことが期待される。

2、シンポジウム「銀山が育てた郷土史家の世界」の開催

平成 22 年 2 月 20 日～21 日、朝来市生野書院・生野メインホールにおいて、シンポジウム「銀山が育てた郷土史家の世界」を開催した。これは、生野の方々から石川家文書にふれてもらいながら、整理を進めるなかで明らかになった生野銀山の歴史や、同文書群の意義について考えてもらうことを目指して開催したものである。プログラムは下記の通り。

■ 2 月 20 日(土)

16:00 石川家の古文書にふれてみよう会①

■ 2 月 21 日(日)

9:00 石川家の古文書にふれてみよう会①

13:00 郷土史家をかたる座談会②

①では、石川家文書の整理を、生野町の方々と神戸大学の院生が協同でおこなった。例年のように、一度整理を終えた古文書ではなく、未着手のものを使用した。桐箱に入った古文書の保存状態をデッサンしながら記録し、その上で整理をおこない、もとの桐箱に戻すという一連の作業を体験した。

②では、石川家が輩出した歴史家である石川準吉氏のご子息である石川通敬さんと、現在でも銀山間歩の追跡調査・研究をすすめておられる山田定信さんにご講演いただいた。

石川通敬さんは、準吉氏の官僚と歴史家、両面の功績について、父親としての素顔も紹介しながら説明

した。とくに、準吉氏が制作・立案に携わった法律にかかわる書類群、ならびに名著『国家総動員史』の草稿などの保管・活用方法について、所蔵者ならではの悩みをお話いただいた。実物と複製の違いや、現地生野での活用方法の見通しなどについて、活発な議論がなされた。

一方、山田定信さんは、三菱マテリアルで勤務されていたご自身の経験も踏まえて、現存している間歩の様子や調査の方法などについて説明した。郷土史家の研究と自治体の意向がうまくリンクしないまま、研究成果が宙に浮いている現状を指摘された。また、今後の研究展望として、コンピュータグラフィックを用いて銀山間歩を立体的に復元することを提案され、大学と協力しながら作業を進めていくことが話し合われた。

シンポジウムに参加した方からは「公的な機関（行政）では対応できないことでも、大学ならば対応することができ、地域の歴史を一緒に考え、一緒に明らかにし、それを社会に発信させていくことができる」「大学が関わることは、地域歴史遺産を地元の人々を中心になって保全・活用していけるようなシステム・ノウハウの構築・定着を図る上で有益」「商業ベースに載せて歴史遺産の価値を計る考え方など資料保存の問題に横たわる厳しい現実があることを知った」といった声が寄せられた。（文責・添田仁）

丹波市春日町棚原地区・丹波市教育委員会との連携事業

平成 20 年度（2008）に引き続き、今年度も棚原区パワーアップ事業推進委員会や丹波市教育委員会と連携した事業を展開する事ができた。本年度の事業成果と課題の概要は以下の通りである。

(1) 丹波市内自治会・個人所蔵文書調査

本年度も、丹波市と神戸大学大学院人文学研究科との協定（2007 年 8 月締結）に基づいて、自治会文書および個人所蔵文書の調査を行った。

奥地区では、公民館所蔵文書の中性紙箱への詰め替えと撮影、および目録作成を行った。柏原町上小倉の飯谷家では、当主より、昭和以後を中心とした部落誌の作成に向けた動きが同地区内で起こっているという情報をお寄せいただいたが、その作成に当たっては同家文書を使用する予定はないという。しかしながら、同家には明治期以降の地域運営に関する重要史料が多く所蔵されている

ことが分かった。本年度の調査においてはひとまずこれらを中性紙箱に詰め替え、適切な保存方法を所蔵者に説明するという措置を講じた。青垣町足立家では、同家の由緒に関する史料数点について、所蔵者より説明を受けた。同家の歴史の掘り起こしと同地区の地域活性化を、いかに両立させていくかについては、今後も所蔵者・市教委とともに方向性を探っていきたいと思う。また、山南町梶地区および氷上町市辺の光明寺でも調査が行われた。まず梶地区においては、昭和戦前期の国防婦人会から今日の婦人会に至る一連の婦人会関係史料など、近代を中心とした大変興味深い史料群が「発見」された。今後の課題としては、①昭和3年(1928)から現在に至る区有文書引継目録を参照しつつ、これまで何が引き継がれてきたかについてのリストを作成すること、②文書保管のスペースを設置すること、などが挙げられる。次に、氷上町光明寺である。同寺は現在無住の状態となっているが、その門楼部分には多くの史料が所蔵されている。地元住民はこれらの保存について現時点ではさほど関心は高くないようである。今後調査を進めていく中で、同寺文書の「価値」について、地元住民との共有を図っていきたい。

昨年度から継続している作業の途中経過については以下の通りである。小野尻自治会文書および個人所蔵分の北太田西垣家文書・大河西垣家文書については目録を作成中であるが、近く09年度本事業の報告書において現時点での成果を公表する。また、昨年度に撮影と翻刻が完了した谷川の若宮神社文書については「享保五年坂本講堂聖観音木像再建喜捨帳」を活字化したものを同報告書に掲載する。和田の木戸せつみ文書については、写真・映像資料のデジタルデータ化作業を進行中である。氷上町成松の田中克二家文書については長持に収納されている近世文書分の撮影・目録作成作業を進行中である。

(2) 柵原パワーアップ事業推進委員会との連携事業

定期的開催されている柵原PU委と地域連携センターとの合同会議は、今年度ついに50回目を突破した。事業についても、昨年度同様、両者および丹波市教委との連携によって進めることができた。春日町波多家文書の整理作業は、柵原地区住民との協働によって進められ、現在ではその大部分が完了している。また平成22年1月、リ

ニューアルされた新公民館には資料室が設けられ、旧公民館からの地域史料の移管は恙なく完了した。当面は①「天満神社縁起」の調査報告の取りまとめと、その成果物の地元住民への配布、②大正時代に近世文書を巻物としてまとめた「古文書巻物1・2」の冊子化、③土地・年貢(絵図も含む)関係史料の読解とその成果物の発行、及び④地域史料伝来情報に関する聴き取りの実施、以上を中心として事業を継続する予定である。



(3) 柏原歴史民俗資料館収蔵史料の調査

平成20年(2008)6月、山南歴史資料館が廃館となった。この出来事により、僻地の地域資料館を地域の歴史文化の活性化のために、有用たらしめていくことが新たな課題として浮上することになった。柏原歴史民俗資料館での調査事業は、そうした課題意識に基づいて、本年度より開始されたものである。

同資料館には、柏原藩政史料や近世の在地代官上山家の史料などといった、領主関係の史料が豊富に収蔵されている。こうした史料を重点的に調査・整理することによって、個別の村域を越える広域の歴史や支配の構造などがより詳しく理解できるようになるとと思われる。

当面は6箱におよぶ上山家文書の撮影・目録作成を進行させる予定である。調査の成果については「広報たんば」や柏原町での講演会、また状況次第では同資料館での特別展示によって、積極的に公表していくつもりである。これは来年度の課題としたい。

(4) 来年度の課題

来年度(2010年)事業は、①丹波市6町巡回史料調査・現地説明会、②柏原歴史民俗資料館収蔵史料の調査、③レファレンス事業を三本柱として進めていく予定である。これらの事業を通じて

①棚原のようなモデル地区の他地区にも設けていくこと、および②歴史の中における市内旧町・各地区の関係性・重層性を描き出し、その成果を地元住民に還元することによって地域資料館の意義を再認識してもらうこと、この二つの課題を、徐々にではあるが、クリアしていきたいと考えている。
(文責・前田結城)

協定締結にもとづく加西市との連携事業



〔加西市旧海軍鶴野飛行場戦争遺跡調査〕

2008年度から、加西市教育委員会とおこなっている、旧海軍鶴野飛行場滑走路跡地周辺の文化財調査(加西市鶴野町)では、2010年2月15日、残されたコンクリート建造物の実測調査を実施した。これらの遺構の多くは、神戸大学農学研究科附属食資源教育研究センター内に多くあり、農学研究科地域連携センターの多大な支援によっておこなわれた。

実測調査は、食資源教育研究センターの教育に支障がなく、遺跡附近の雑草の枯れる冬季に限られた。残存するコンクリート建造物のうち、機銃座跡を除く、防空壕跡、弾薬庫跡とみられるカマボコ型構築物はほぼ同じような形状をしており、それに前室がつけられたり、折れ曲がったりしているなど変化したものだった。実測調査は、代表的な形状のカマボコ型構築物を2か所、機銃座跡2か所でおこなわれた。機銃座跡では、神戸大学内に残存するものは、地上部での崩落がはじまっており、全体像がつかみにくい、下部に入って調査が可能であった。一方、民有地に残存するものは、地上部の調査は可能であるが、下部にははいれない状況であった。そこで、それぞれ調査可能な部分の実測をおこなった。

旧海軍鶴野飛行場は、姫路海軍航空隊基地で

あり、川西航空機鶴野製作所でできた戦闘機のテスト飛行場でもあった。姫路海軍航空隊基地の図面を確認するため、防衛研究所図書館史料閲覧部で調査をおこなった。また、1947年米軍撮影の航空写真、2004年航空写真を入手し、実測図と比定しながら、現状把握に努めている。

なお、2009年12月14日、兵庫県立北条高等学校3年の総合学習受講生が、鶴野飛行場の現地見学をおこなった。平和学習の一環との位置づけで、生徒たちは、食資源教育研究センター内にある遺構を熱心に見て回った。担当教諭によると、地元の戦争を考える良い教材であるにもかかわらず、地元でもあまり知られていないという。今回の調査を通じて、地元で活用できる成果をまとめていくことが求められている。

〔連携協力に関する協定の締結〕

2009年5月16日、加西市と神戸大学は連携協力に関する協定を締結した。加西市には、農学研究科附属食資源教育研究センターの所在地である。本学では、大学施設所在地の自治体との連携を重視してきた。協定の締結により、両者は相互発展のため、文化、教育及び学術の分野で連携・協力し、生涯学習に関する諸問題、加西市の文化遺産を活用した地域との連携事業について、協同で研究等に参画することになった。昨年来、実施してきた旧海軍鶴野飛行場戦争遺跡調査もこの中に位置づけられる。(文責・佐々木和子)

伊丹市における連携事業

1、伊丹酒造組合との連携事業

○伊丹酒造組合が所蔵する古文書のうち近世・明治期のものは目録化が終わり、現在昭和(戦後)から平成にかけての史料整理を行っている。

○酒造組合主催の小西酒造株式会社の社員を中心とする「酒造家史料を読む会」は毎月一度、社外の会員の入会もあり、熱心に続けられている。

○酒造組合主催の年間のイベント「米づくりから酒造りまで」は今年も六〇人余の会員の応募があり(リピーターが多い)今年も猪名川町の田圃での田植えから始まった。仕込み前に杜氏さんが亡くなり、去年とは違った蔵での仕込みになった。

○西酒造株式会社・伊丹酒造組合・荒木村重研究会主催・伊丹市文化財保存協会協賛の「新・伊丹歴史探訪」(会場:白雪長寿蔵ミュージアム)は

今年一―月通算一二九回目の講演を無事終えることができた。毎回一〇〇人を越える参加者を迎え、来年度の計画もほぼ整った。

○酒の日のイベントはこれまでの懇親会とは趣向を替え、「きき酒」を中心に開催された。一つには、毎年酒造組合中央会（本部東京）で行われる「全国きき酒大会」の兵庫県代表二人を当組合で選出するためだった。ここでおよそ一〇〇人の中から選出された方が県代表として東京で行われたきき酒大会に参加し、みごと優勝した。これまで四九回開催されたうち兵庫県代表の優勝ははじめてだったとのこと。

○九月二七日、京丹後市小西地区からバス二台を連れ六〇人ほどの方が小西酒造に來た。これは一〇年ほど前、小西家のルーツを尋ねて小西区にバスツアーをしたことがあるが（参加者一名）、そのときのことを寺の住職さんから聞き、今度は伊丹へ、ということとなり、小西区の一〇〇人余の住民のうち半数以上の方が参加したという。小西家・伊丹・酒造り等についての簡単な講演、食事会など、このような交流から何かが生まれるかも知れないと思わせる出来事だった。

○「白雪蔵まつり」は毎年二月の第二日曜に、会場は長寿蔵駐車場と三軒寺広場を中心に開かれ、市域の会社も参加し市民の年中行事となっている。今年は「米づくりから酒造りまで」の中で行った人気メニュー「杉玉づくり」も取り入れ（会場：富士山蔵）、寒い中にもかかわらず賑やかに開催された。しかし、通りがかりの人々に樽酒を振舞う「振る舞い酒」に一定の規制がかかる等、最近の飲酒の取り締まりの影響もみられた。

2、伊丹市御願塚地区との連携

御願塚古墳保存会で作成中の「御願塚イラストマップ」は完成間近である。マップ作り担当の六人のメンバーで三年ほど前から毎月神社の社務所で打ち合わせを重ねてきたが、二月中旬に再確認をし、同月末に最終チェックを終えて、印刷にかかるよう進めている。用紙サイズ A2 両面、発行部数一万枚を予定。（文責・石川道子）

宝塚市山本共有財産管理組合との連携事業

本年四月上旬開催予定の植木祭り（宝塚市主催）と同時開催される「山本の歴史」展の準備を進めている。展示は山本自治会に保存されている

近世の絵図を中心に周辺史料、および植木の産地として地域の特性を示すパンフレット等を考える。自治会保存以外の資料については宝塚市立図書館市史資料室で把握されているものを中心になる予定。

山本共有財産管理組合ではこの企画を契機に、保存している絵図史料の修復を行った（九点、およそ二〇〇万円）。展示会場は植木祭りの開催場所と隣り合った「あいあいパーク」の中の二部屋分が予定されている。また、二月末日の管理組合の総会において、四月の山本の歴史展にむけてのプレ講座「山本の歴史史料―古絵図を中心に―」が催される。（文責・石川道子）

尼崎市における連携事業

2006 年度に新たに紹介された京都大学総合博物館所蔵「宝珠院文書」は、中世長洲荘に関わる文書を多く含んでおり、今後、尼崎市史を構想する上で重要な文書群である。これに鑑み、中世史の研究者を集め「宝珠院文書」の内容を検討する宝珠院文書研究会を継続的に開催することとなった。

研究会は 2009 年 9 月 8 日からスタートし、第 1 回は方針についての打ち合わせをおこない、第 2 回は 10 月 16 日、大村拓生「鎌倉後期の尼崎―「悪党」教念・教性の活動を通じて」、市沢哲「早島大祐氏「乾家と法華堂荘園―中世後期の長洲荘」について」、第 3 回は 12 月 4 日、古野貢「文書中の細川氏内衆」、天野忠幸「宝珠院文書と三好一族」、第 4 回は 2 月 5 日、藤本誉博「中世都市尼崎の形成と展開」小橋勇介「宝珠院文書にみえる長洲荘の開発地について」の各報告をおこなった。（文責・村井良介）

三木市での連携事業

2010 年 2 月にリニューアルオープンする旧玉置家住宅に保存されていた近世・近代資料の整理と活用について、三木市観光振興課の担当者との協議を行った。来年度からは、センターの担当者が市民とともに古文書を読んで調査を行い、市の新たな歴史像の掘り起こしを行っていく方向性で調整を進めている。（文責・三村昌司）

福崎町との連携事業

平成 21 年度より「辻川界隈の地域歴史遺産掘り起こし及び三木家住宅の活用基本構想作成」と題する共同研究を開始した。本年度については、兵庫県の重要文化財である大庄屋三木家住宅の修復工事が来年度より開始されるため、主として三木家住宅活用に向けた取り組みを行った。平成 21 年度神崎郡歴史民俗資料館連続講座（2009/9/19 実施）では、「三木家からみる播磨・福崎」と題する講演を行い、主に江戸時代三木家の大庄屋としての役割に着目しながら、同家が地域の交流の核として機能していたことを明らかにした。

また三木家住宅活用の参考事例とすべく、三木市玉置家住宅、高砂市入江家住宅等すでに修復工事を完了した伝統的歴史的建造物を視察、関係者に工事とその後の活用に関する様々な意見交換を行った。

福崎町・辻川地区の方々などで構成される辻川界隈検討委員会・三木家住宅活用検討委員会に出席し、「三木家住宅活用基本構想」作成における助言を行った（2009/8/19、9/30、12/1 実施）。また大庄屋三木家に保管されている史料（2009/8/19、2010/1/19～20、2/16～17 実施）、及びこのたび新出の三木家史料（未整理）についての調査を行った。後者については、辻川地区の住民の方々とともに、写真撮影による調査を行った（2009/12/19、2010/3/17 実施）。さらに二つの史料群についての調査の成果を、本年度末に福崎町へ提出する報告書及び神崎郡歴史民俗資料館企画展「見つけよう！新たな歴史発見～地域の歴史は身近なところに～」（開期：2010/3/6～31）の展示に反映した。

昨今の厳しい行財政状況のもと、三木家住宅修復工事は長期にわたる見込みである。したがって、修復後の活用について検討する時間は十分にあるといえる。次年度は地域の方々とともに建造物（ハード面）の整備を活かすためのソフト面の充実を図っていきたい。具体的には「町史を読む会（仮称）」の立ち上げ、福崎町の歴史を紹介するホームページを立ち上げ、調査・研究成果の蓄積とともに即時的な発信が行えるよう努めていく。（文責：河野未央）

猪名川町との連携事業

今年度、猪名川町とはじめて連携して、2009 年度の猪名川町生涯学習カレッジの 1 講座を受け持った。全 12 回で参加者は毎回定員いっぱいの 40 名であった。講師陣には本センターの教員、研究員、関係自治体の歴史関係職員で構成した。

本講座では、猪名川町域の歴史について、町民にわかりやすく、古代から近代にいたる猪名川町域の歴史を伝え、さらにフィールドワークを行うとともに、地域の歴史資料にふれたり、水損資料の保全のための応急処置法を学ぶなど、町民自らが地域の歴史研究のあり方を学ぶという新たな手法を取り入れた。

町民からの評価はおおむね良好で、地域の歴史講座については、定員に収まりきらない方のために、サブ講座がひらかれることとなった。本講座については、猪名川町の地域歴史研究グループからの現地での支援があつて内容を充実させることができたことなど、市民が主体となった地域歴史遺産保全活用のあり方を考える重要な実践となった。しかしながら、大学が全体をつなぐ形で行われ、自治体、住民、大学三者が、共同して事業を行うことにはならず、この点で課題を残した。

（文責・奥村弘）

『新修神戸市史』の編纂事業

2006 年度から神戸市文書館と連携し、『新修神戸市史』の編纂について、受託研究を進めてきた。今年度は昨年度に引き続き、『歴史編Ⅱ 古代・中世』の編集作業を進めた。また地域連携センターのこれまでの活動で撮影した「天城文書」等の写真を、原蔵者の許諾の下、市史に提供した。（文責・村井良介）

『播磨新宮町史』の編纂事業

2009 年 10 月に『播磨新宮町史 近現代編』が刊行され、本年度をもって町史編纂事業についてはひとまずの区切りがついた。これを記念して 2010 年 2 月 28 日に「たつの市町史第一次完成記念シンポジウム『たつの地域の特性（地形・気候・文化）から歴史をさぐる』」が開催された（於

：たつの市立新宮公民館2階ホール)。当日会場では、「なつかし写真展『伝えたい 新宮の歴史』」と題するパネル展示のほか、たつの市域の各歴史研究団体・地域連携センター・歴史資料ネットワークの活動紹介パネルが展示された。

シンポジウムは最初に奥村弘氏による基調講演「地域をささえる歴史文化―市町史をあしがかりに」があり、続いて奥村氏をコーディネーターとしてパネルディスカッションが行われた。パネリストとして梅村忠男氏(元新宮町長)・前田宗男氏(元新宮町史資料収集委員)、さらに町史執筆において各時代の部会長を務めた坂江渉氏(古代史)・市澤哲氏(中世史)・大国正美氏(近世史)・神戸深江生活文化史料館長)、町史編纂事務局を務めた義則敏彦氏(たつの市教育委員会文化財課副主幹)のほか河野未央が参加した。奥村氏は、講演で、粘り強い地域史研究の伝統のうねに成り立つなどの播磨新宮町史の特徴について触れ、さらに新たな地域歴史文化形成に向けた町民―自治体―大学の三者による持続的な歴史文化事業の重要性を訴えた。またパネルディスカッションでは新宮町史編纂時の状況、新たな研究成果などが披露された。河野は、継続事業として行われている神戸大学近世地域史研究会の取り組みを紹介した。当日は200名をこえる参加者を得、盛況であった。

シンポジウムに「第一次」と銘打ってあるように、たつの市の歴史遺産の保全・活用をめぐり、今後ますます行政・市民・大学の連携を深めていく必要があるだろう。シンポジウムの翌日におこなれた西田正則市長と奥村弘事業責任者らとの懇談会でもこのことが話し合われ、来年度以降、継続的なまちづくり事業をすすめていくことが確認された。(文責・河野未央)

『三田市史』の編纂事業

〔編集・執筆〕

地域連携センター担当教員等が編集・執筆に関わっている『三田市史』近代史部会は、2011年3月刊行予定の本文編に向けて、2009年度はほぼ2カ月に1回のペースで定期的に部会を開催し、各執筆者が担当部分についての執筆構想を発表するなど準備を進め、目次と割当頁数をほぼ確定するに至った。すでに一部の原稿は執筆を終え、次年

度の夏頃までにすべての執筆を終えるべく引き続き努めていく予定である。

〔祥雲文化セミナー〕

兵庫県立三田祥雲館高等学校が行っている「祥雲文化セミナー」のうち、今年度は7月16日(木)と11月20日(金)開催分の2回を、同校と三田市、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターの三者の連携によって開催した。「江戸時代に触れる」をテーマとし、地域連携センターの教員、研究員が、高校生や市民と歴史資料の保存や読解についての指導を行った。大学、自治体、高校の三者連携は例が少なく、地域連携の新しい試みとして、今後も継続していく予定である。(文責・河島真)

『香寺町史』の編纂事業

昨年度に引き続いて『香寺町史 村の歴史』の編纂事業を共同研究事業として進めた。2008年度末には「通史資料編」が刊行され、本年度(2009年度)は「通史本文編」の刊行作業を中心として進められた。全体の編集委員会の会議は以下の日程で行われた。

■第17回編集委員会 2009年5月10日(日)、第18回 2009年7月12日(日)、第19回 2009年9月13日(日)、第20回 2009年11月1日(日)、第21回 2010年1月24日(日)、臨時 2010年2月14日(日)、第22回 2010年3月28日(日) (予定)

なお、部会ごとに編集作業部会・調査・研究が行われているが、その日程については省略する。

2009年3月に刊行された「通史資料編」は、考古資料・古代・中世・近世・近現代・民俗という様々な時代と分野を網羅した資料編である。この資料編刊行後、香寺町史編集室が「町史を読む会」が毎月1回第4日曜日を定例としておこない、第1期として2009年7月から12月までに全6回開催された。

編集委員会では特に「通史本文編」の表記の方法、図版・写真、口絵をどのようにするかという細かい点まで話し合われた。資料編と同様に町民にとって読みやすく、使いやすい町史とすることを特に意識して編纂作業が進められ、原稿執筆と校正が順次進められた。また新史料が発見されたため、これを「通史本文編」に掲載する事などが決まった。

なお『香寺町史』編纂事業の終了後において、香寺町の地域住民にとって大きく関わる問題が町史刊行後の体制である。「通史本文編」を刊行した後、香寺町史編集室は閉室することが決まっているため、収集した歴史資料の保存・活用をどうするか（どこへ移管するか）ということが大きな問題となる。香寺町は姫路市と2006年に合併したため、姫路市の史料保存・公開体制との関係が問題になるが、現在のところ、香寺町の歴史資料は香寺町内で保存される予定であるものの、常時の公開や活用のための環境がどのように整備されるかは不透明である。今年度末に刊行予定の通史本文編も含めて4冊の『香寺町史』の刊行、そして町史編集室が刊行した多くの報告集や年報の刊行は香寺町内の歴史文化を守っていく一過程であり、町民自身が史料を通して香寺町の歴史文化を守り育てていくためにもその環境整備が必要であると思われる。

なお2010年3月1日（月）に香寺校区連合自治会と神戸大学地域連携センターの間で2010年度の香寺町の地域歴史文化に関する話し合いを持った。刊行された『香寺町史』を活かし、その過程で収集した歴史資料を保全し、公開・活用することなどについて、両者が協力していくことが確認された。（文責・深見貴成）

第3章 被災資料と歴史資料の保全・活用事業

歴史資料ネットワークへの協力・支援

1、2009年8月台風9号水害関連

2009年8月に発生した台風9号は、兵庫県佐用町・宍粟市・朝来市、岡山県美作市を中心に住宅被害・人的被害をもたらした。災害救助法が佐用町・宍粟市・美作市に適用されたのを受けて、当センターメンバーは史料ネットと協力し、発生直後より土砂災害・河川氾濫などによる出水状況・道路被害などに関する情報収集を開始し、11日には兵庫県教育委員会文化財室と連絡を取り合い、古文書の被害についての情報提供依頼と、要請が入り次第支援を行う旨を確認した。また、同時並

行的に佐用町と宍粟市の民間所在史料に関する目録、被災地巡回時の配付チラシ、巡回調査票の作成、水損史料保全資材の調達を進める一方で、当該地区の地域史研究団体のメンバーへお見舞いととも被害状況についての聞き取りをおこなった。事前準備をした上で、佐用町教育委員会藤木透氏や宍粟市教育委員会田路正幸氏と連絡を取り合いながら、史料ネットメンバーとともに被災地での救済活動を進めることとなった。

その結果、2月末日まで、活動日数24日、参加のべ人数174名、水損史料応急処置・レクチャー件数15件（佐用町13件・宍粟市一宮町2件）、巡回調査地区6地区（佐用町力万・久崎・小赤松・仁井・円光寺、一宮町安積）である。朝来市内は市教委情報によると被害なしとのことであった。一方で、佐用町久崎地区のI家文書や小赤松地区のM家文書や仁井地区区有文書、安積地区のA家文書の一部が廃棄されたとの情報も得た（活動詳細については史料ネットブログを参照）。

今回の水害対応は、2004年台風23号以来5年ぶりのものであった。前回と比較して4つの点で前進があった。第一に、被災地の文化財担当者・所蔵者から直接救援依頼が入ったことである。兵庫県教育委員会文化財室との連絡体制が整備されてきたこと、新聞報道により神大の事務局に連絡をいただいたことなどが関係したのだろう。第二に、県や近隣自治体との協力体制がさらに深まったことである。県内での真空凍結乾燥も水損史料救出当日から話がまとまり、県博や県考古博職員、佐用近隣のたつの市教委や福崎町教委の職員らが救出作業に参加した。第一の点とも関係するが、文化財担当者の方々と地域連携センター主催の協議会などの場で以前より顔見知りであったことが大きいだろう。第三に、民間所在の古文書だけではなく、民具や写真資料、屏風・襖下張り、書画、絵図、さらには公文書や図書資料についても救出や修復処置のレクチャーをおこなうことができた。県内各機関の学芸員・アーキビスト・自治体史編纂担当職員や、全国各地の保存科学の専門家